

地療養 なんて 贅澤 も出る

すが金の無い人でしたら麼うしても
に手頼るより他はないのです」と一
巧い言を仰云る、僕は此所に於て二
所謂偉い人達は「神に病氣の平癒を
つたてて神業が夫れ醫者やあるま

し藥をやるまいし病氣が平癒して
るものか」など仰云るが醫者に診察
て貰ひ藥學博士に授藥して貰つて
ぬ人はあるのだもの神に祈願を願

からして十人か十人獲るを得るに
は輕快するとは限らぬのは其所であ
う、併し決して御利益の無い筈はな
いのだ、聯合遠征からでも可い神を供
るものは全然神の存在を認め得ぬ

よりは差懸である。と僕は讀じて居るのだ。『天國に生せしめ玉ふ』と讀するのゝ『現在天國にあらしめ玉ふ』と讀するのとは同一ではあるまいか。前者の語句が成就するものなれば後

の立願も又徒勞には終るまい、と信
 じて居るものである、次と筋時な
 金や油揚げで神様に御利
 の大御心を願はうと試む

は愚痴の沖汰だ云ふものである。
「御尤です。私共、灣給者は賤者様様
高くです。時に食稻荷様の本山
方ですか」と尋ねたら「御中高松」

を襲み、毛利家の驍將清水長左衛門
羽柴筑前守の雲霞の如き大軍を拒ぎ
水攻の奇計に力及ばず一死を以て
の死に代りたる高松城址と一簣の

林中の小祠に見る備中高松
稻荷様の分社であるところ
て然らば僕の爲めには記念多き所
「和尚さんは何時都渡辭でしたか」

國へは「八年に成ります……エ、人は一日に百人内外あります」と此所に於て彼は眞の手を出して「新親となる時なぞ親戚が

忍ふ夜は、幸も邪魔なりしうら時雨、
待たれど、身より、待つ人の、姿の影は
かなき胸の内、戀撫や未練にのぼさ
れて、知りつゝ野暮な神はい、い
つか来りし此の苦勞。
た寮に申す本願子、其術に罹つて耐も
たせし賢鬼もせず本町通りに出てそ
まじと一呼(笑終)

●壽座の三田光一

▽妻まさ子、身置石、刺傷
壽座に於ける千里眼自覺者三田光一の
面目を観るべく十日夜七時突行つて見

透視術の眞像を試むべく、是は社會で御一
の透視術を行はんとせし光一は、髪を代
する京城新報社からの御所望だから
斷つて當時沈思黙想の後記者が密に西
中に密閉した透視物を「紅葉庵代埋
二管野崎報館商店」と記して一たび大
名刺でやうと文句まで一字一句違
ず錦標に言明した觀客の拍手喝采は、
く喝も止まない「宇宙萬物の出現」
云ふには觀客にカードへ注文の品を
かせ即座に其の品を現出せしむるの
透視の後直ちに行つて朝鮮銀、當日は
南大門、川間の鐵道乘取初符、金光

とて既う見物は平土問と東西幾敷に充
溢せる其の人氣は素晴らしいものだ恰度朝
霞で香煙、終つて一般の下りたところ
だ發機も舞臺正前の欄間に引き廻した
大船も同じ様に金糸の刺繍とした
京明治座産附茶屋ひなのから賣り物
で言はふしての本舞臺とも踏入れ
て言がある身分と云ふことに觀客に納
めさせるのは新得でものもであらう
舞臺上にも口上の前掛けと共に更
介入れた燕尾服に風天の真只眼が
脚腰を厭へて足程膝下で分けた履經
りの高襟身が即ち雪の三田光一であ
る入口の名札を現はしたた是れは外に
類のない露蔭ではない又た最後は試
顔に一瞬特の「身振石刑捕」といふに
違ふまじいもので腹筋の知覺神經を震
かせしむる位まで當代では四十一歳
餘の大石を亦拙々の腹帯へ巻せて二
重の襦袢で打ち下して之れを三つの
たがに其の火花の散りゆく流りに雲衣
然なもので光一が覆隠した從後縁や
更に下ながら平然たるに至つては
更に袖中の妙で只露齒するにまつて
張で閉鎖した見ねは末代の跡身清酒
といふは何人か是非一度は見聴すべ

其の前身が橋樑の奇術師であつたといふ、だつた、適切な言葉をバツ／＼させる其の技が、あまり鮮明なるもの、観客は現して其の世俗的なな姿態に、一瞥を要して居る演藝は「空氣の壓力」空中、目、目、目、行」と云ふので先づ一組のトランプを圓形に手裏に繞べて、速にしたら左右にたりして「壓力の加減で少しもカタルが散らぬ處に手練の程と示し、次に舞臺の電氣を消してランプの石蓋が充ての、鏡に依つて見物客の顔の上に影を映さ、胡蝶の如くに奇麗に然り過るのを演じ、最も此の自在風は針金を線として、熾時、變じ居た。此に就て一言せんに

可憐な陛下下の赤子

▽電車の不法侵入に泣き入る

十月午後一時二十七分頃余の便乗した、鐵路發行人十三號、電車が車掌三、運轉士七、行三、檢査員を通過せんとす、際目下同檢修理の爲め穴を掘りこんど、と一人の海軍其練に立ちて其穴と、居り危険なるに、運轉車は非常鋭く、穿したるもの、海軍に交付せずして、避さし、爲り突飛、それ穴の中に陥落す、時、變じ居た。此に就て一言せんに

とのたとへ光一自身も稱して居るが、只其社の現業員、監督等が常に如何に命令の巧妙なるには何人も成心の外はない。居るにや運轉手は如何なる危險の目に對しての千里眼と云ふのは長さ一尺に巾五寸、高さ七八寸の杉製の嚴整な箱の中に顧客に何でも入れさせて光一が之れと騒動して居る體で、その邊長は土師に對する所なり。要するに割せられざればこそ毎日事故頻發するなり加かに運轉艇を着て居た男の入れた煙草のが爲めなり人命と輕視するが爲めなり

朝鮮人も吾人と同じじやんや

日本帝國の臣民なり

を嘲らして逃げされば電車は其人を救しても可なりと思へるが爲めなり

斯くして電車は盛んに入人を轢き人を殺するに備へたる奴が固執せしむる奴は殺人犯なり問彼には意志なきればなり彼れを轢とせざるがに意なきなり惡きなり惡きなり傷害犯人を檢せざるは不法ならずや罰を弱しめて顧みざるは政治の要にわらず

是れて自ら朝鮮人も我皇の赤子と

非常

望み、觀望當局に對しては一考を煩ふ
 日會社に對しては運轉手への嚴戒
 二日正午より高等女學校各舍に於て
 催せらるゝ同校生徒の音樂部演奏願
 左の如し
●高等女校の音樂會
 (一)ピアノ連彈(ラ)ダ(三)三子みゆ子
 市川キョウ(二)合唱(甲、心の鏡)乙、
 エビリンダ(三)ピアノ連彈(甲、オ
 第一學年)同(三)ピアノ連彈(甲、オ
 (四)合唱(甲、野外的音樂(二重唱)乙、
 配所(日)敘事第三學年)同(五)オ
 (六)獨奏アリヤ(槍垣アキ)

[illegible]

● **殺人犯人の自白** ○毎年度、宇仁川署の活動
八日、川築港場に於ける殺人操縦者
其の筋に引かれ、奴隷園に入る。庭
茶良郷、成瀬湖南村大字、古寺三十六
地富、仁川花房、町住、田鹿追(この
爲に、自ら自白に及びければ、一月拘
局に送り、来る

第四回(一月一日)に、中村泰樹、カワコ
(七)等、旅順開港決戦後、金澤牧場
(八)未定、資九、台、昭和、水の、梨園
重吉、第三回學年一同

● **究明会** ●大演、演、奏、曲、日

△沼城ホテルに於ける
二日午後四時より開演すべき井上徳
子門下の演奏曲目左の如し
小曾上 小野文子 櫻 赤垣泉蔵 (小野
千春子 謙) 教員上 福岡氏 西郷隆盛
田川氏 佐々木氏 扇の扇
田氏 常盤丸 橋田順軒 城山 豊野
秋 平野次郎 中村相子 藤 義興 入寄

上坂崎曉、五原中佐、伊藤中尉、敦
賀中尉、田中中尉、石堂君、市來、越前、
中野、田田、山田、常陸丸、松尾、
智海、本館主、山口、求女、井上、
近江八景、水鏡、(略)

仁川、本町の出火、十一日午、
三時、仁川、本町三丁目、日暮、
氏氏の經營に係る大町三丁目、
運送所より出火せしを、越前中の中島、
消防隊、及、勇消防隊等、速に、
消火に盡力し、約一時間、一、
半、

當、地、歌、飲、夜、至、日、初、日、を、出、し、た、吉、田、田、強、豪、を、
奈、良、男、桃、中、軒、天、一、等、の、一、行、の、浪、花、寄、附、を、
を、離、れ、た、初、日、と、云、ふ、の、年、輪、に、特、別、な、
の、一、部、と、認、め、て、殆、ど、立、派、の、地、も、な、
儀、の、行、つ、た、時、は、既、に、吉、田、田、強、豪、が、都、生、
仙、舟、を、賣、り、掛、て、居、た、早、川、燕、平、に、使、
似、た、好、い、調、子、だ、が、長、講、に、な、つ、た、中、
に、

●奈良男一座の大入●
別、れ、長、講、三、高、徳、は、前、夜、の、講、き、な、い、
に、同、人、の、贈、物、は、一、亦、垣、原、重、利、の、
竹、本、小、浪、一、度、の、娘、崎、太、夫、
浪、花、箱、

にして二時四十分鐘火したる原因は、
 明なるも夜更け半燈油盆の破裂せし
 ののたるんと損傷高約三百圓餘ならん
 尤右の古巢に二百八 原野山十番僧阿武女
 新町、宇土、垣根、原野山十番僧阿武女
 五ノ愛媛縣新居郡堀生村四百
 十五番石田トワ(ニ)と云ふ別荘は
 府所直大田村運店大和川并田島外
 村の地所なるを兩人共耕の土去
 日逃走京賀間に潜伏し居りたるが此
 山家兵隊の探知する所となり九日
 一抱土主へ引渡され古巢へ還戻り

一の孝子傳五郎正宗 此の人の名は細川
 美し而して能く遊る藝だ、朗吟や
 いて居る如て心持が宜い、彼れが師匠
 の要入にアエとて關子はある
 の天一には有難逢えたらうが警は極
 に老じて名ののみ徒らに高く飛はし願
 脱かし願の曲藝に漸く其呼吸を整ん
 マンに剛當に大家がらすして大安
 長陣、而して其長陣が極めて速いの
 緋城、其山の諸君の如にビシ
 するから筋が揃つて一層面白、大

[illegible]

日曜集會

謝近火御見舞
仁川 高杉 岸町

謝近火御兄舞
仁川 町三丁目

共榮社、續木仙吉

謝近火御見舞
仁川 本町二丁目

田中良助

謝近火御見舞
仁川 町三丁目

平山末吉

午前九時半に、日曜學校午前十時半に、藤岡牧師の禮拜、説教、神の人、午後一時より丹羽清太郎氏の「人生の轉機」を傳道堂敷ありと

演説だつたり

教座 千里阪三田光一の自署に其地

謝近火御見舞

仁川本町二丁目

竹田津三平


謝近火御見舞

仁川本町二丁目

興田貞次郎

謝近火御見舞
 久野勝平
 加來榮太郎
 謝近火御見舞
 町田文次郎
 鈴木慶藏

新流行新荷看



定價號二
圓七拾金

琴 鈞

一のりな響る説得のな通らなくを請しにを
家人人々種ときさべにゆる我我聴者々張
人生の内に得てし給の然と雖に我耳とに似
園の位作得得しに唯は翹はに於とし彈奏
の位奏得又又三三一即器は一て汚た奏
の栄時に其味二此に般般最す感て奏似
と園流ら狀ののの運の通の快は我
好侶伴と座右にせらに庭の家の運の以
とせらに其の要心家要家の庭なき以
に其が知を得庭家良好になくは能
に故に直に樂的にの用樂ときり能
んく便に直に樂的にの用樂ときり能
春更と聲洋々張はに人器とすはん此の
とと秋く聲一高奏時請るるべも味かの
冬と三は則附々にも所きも鐘現所復
番五四一話電
番五一一管裝

房 書 韓

繁榮會
 御指定
 幟
 提灯
 申込所
 今般及祥盛會の御指定に依り十二月一日より御執行に相成候大賣出し既定
 の幟及祥盛會は弊店等に於て引受け申候就ては準備の都合有之候間大至
 急御用命の程但に帶上候
 京本町五丁目
 電話一九八五番
 京城明治町一丁目
 電話一九八五番
 龜屋染工場
 大嶋商店
 目
 傘提灯商

眼科專門
京橋本町六丁目（元草町金鄰通り）
金井眼科醫院
電話一五五六
金井 豐七
大韓醫院眼科部長

競賣廣告

一書畫骨董品其他珍器
右成行値段を以て競賣致候間陸續御來場被成下度奉願
候 頓首

十二月正午十二時、競賣開始仕候

明治十四年十一月
但シ同日午前中下見御隨意
賣立元大連三三考堂
南大門通三丁目
京城競賣株式會社
電話七百八十四番

●諸公債諸株券 現物賣買 迅速確實に御取扱可申候 兼業 茂野村七代目 田中友吉商店

りん病患者に警告
りん病は、流行性の熱病で、特効薬はない。しかし、適切な治療で、回復する。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

病り方
SANTALIN
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

代理店
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

健腦丸
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

支分
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

京都府用白生油
京都府用白生油
京都府用白生油
京都府用白生油

防腐劑
一度御試験被下たし
特約店
前田中支店
荒井第二牧場

東洋物産株式会社
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

新着
厚板平板
浪板平板
金物商

仁川米穀株式
合資会社
山本組
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

香
醸造の進歩
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

活版印刷
迅速丁寧
鮮明
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

良薬
仁丹
益大好評の
鏡付容器
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

大響發音器
各種音源
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

新着
鏡台
針箱
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

茶
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。

油醬上最
本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。本邦では、りん病の流行は、毎年、秋から冬にかけてである。